

少年の主張

最優秀賞

〇八百津中学校3年 大脇 隆慈

「ランナーコーチのプライド」



最優秀賞の大脇隆慈さん。いきいきとした表情で語り、会場がさわやかな感動で包まれました。

優秀賞

〇八百津中学校3年 浅田 真花

「勝ち組と負け組」

〇八百津東部中学校3年 金井 心音

「私の家族と成長」

〇八百津中学校3年 小沢 翔大

「かっこいい人間」

〇八百津東部中学校3年 野村 菜々子

「本当に大切なもの」

〇八百津中学校3年 山内 怜奈

「大切なもの」

高校生の部

〇八百津高校2年 大澤 優衣

「チャレンジの3日間」

〇八百津高校3年 各務 綾

「将来の夢のために」

(敬称略)

「ランナーコーチのプライド」

八百津中学校 三年 大脇 隆慈

「ナイス、ランナーコーチ！」

少し寒くなってきた11月のある試合でかけられた言葉に、僕はかつてない喜びを感じていた。

僕は小学校のときからずっと野球にうちこんでいる。中学校でも迷うことなく野球部に入部した。しかし、小学校のときはなんとカレギュラーがとれていたけれど、中学校の野球部では人数も多く、なかなかレギュラー入りすることができない日々が続く、そのまま二年生の秋をむかえた。

そんなある日、いつも通り練習していた僕に、顧問の先生から、「よく声が出るから、三塁ランナーコーチをやってほしい。」と言われた。

三塁ランナーコーチというのは、三塁ベースに向かって走ってくるランナーに対して「止まれ」や「走れ」を伝えたり、相手のチームの選手の癖を見つけて、チームに伝えたりする役割のことだ。

僕は、少しだけ迷ったけど、とりあえずやってみようという気持ちで、僕はランナーコーチの仕事を引き受けた。

その日から、僕は試合のときはもちろん、実践的な練習をするときに

もランナーコーチとして参加することになった。ランナーコーチとしてのはたらきを褒めてもらえることもあったが、悔しい気持ちもあった。僕だってもっと実践的な練習をしたことはなかった。その思いが消えることはなかった。

しかし、その思いが変わったのは、11月に行われた三年生との最後の試合をしたときのことだ。そこで僕は、三年生チームと二年生以下チームの両方のランナーコーチをやることになった。

試合も半ばになってきた頃、三年生チームの攻撃になり、初めてランナーが二塁まで行き、チャンスになった。いよいよ、僕の出番だ。しかし、僕は緊張していた。なぜなら、二塁ランナーは中体連までほんのちよつとのことだがみかみと怒るような、ちよつと怖い先輩だったからだ。

僕は正直怖い、と思っていたけれど、ランナーに指示するのはランナーコーチである自分しかない。僕は、勇気をふりしぼって思いっきり叫んだ。

「ゴー！ゴー！ゴー！」
そして、次のバッターがヒットを打つと、先輩は僕の指示通り、迷うことなく三塁まで走り抜けてきた。そのとき、いつも怖いと思っていた先輩から、「ナイス、ランナーコーチ」と褒めてもらった。僕はとても驚いて、うまく返事をするこ

きなかった。一緒にプレーをしていた一年半の中で、先輩に怒られることはたくさんあったけれど、褒められたことは一度もなかった。その先輩が、僕のランナーコーチとしてのはたらきを褒めてくれたのだ。僕は、自分に与えられた仕事に、このとき初めて自信をもつことができた。

それから、僕はランナーコーチの仕事に、それまで以上に一生懸命取り組むようになった。そんな僕の真剣さを今では多くの人が認めてくれている。それは、顧問の先生や同じチームの仲間はもちろん、他のチームから褒められることもあった。練習試合で相手チームの人から「あの三塁ランナーコーチはすごいね。勉強になるよ。」と言われたときは、とても誇らしい気持ちになった。

ランナーコーチは、決して目立つ役割ではない。試合で活躍する選手に比べたら、裏方のようなものだ。でも、僕はこの役割に誇りをもっている。野球でも、学級や社会でも、目立つところで頑張っている人が全てではないことを、僕は知っている。そういう人たちが頑張れるのは、その裏で支えている人の頑張りがあるからだ。僕たちは、一人ひとりが自分の役割を一生懸命果たすことで、互いに支え合っている。

僕はこれから、最後の中体連にむけてこれまで以上に部活を頑張っていく。めざしているのは、もちろんレギュラーだ。しかし、ランナーコーチとしての出場でも、自分の役割を一生懸命果たしたい。それが、僕のプライドだから。